

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄染織文化の研究に関するデータベースの構築

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語:<br>出版者: 片岡淳<br>公開日: 2009-03-03<br>キーワード (Ja): 染織品, デジタル顕微鏡, 芭蕉, 大袖衣, 繊維, 琉球の染織品<br>キーワード (En): Ryukyu, Textile, Formal Costume, Banana Fiver, Weaving<br>作成者: 片岡, 淳, Kataoka, Jun<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9028">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9028</a>  |

沖縄染織文化の研究に関するデータベースの構築

課題番号 10610046

平成10年度～12年度 科学研究費補助金

(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

平成13年3月

琉球大学附属図書館



0020024037611

研究代表者 片岡 淳

琉球大学教育学部

377.7  
KA

沖資

平成10年度～12年度 科学研究費補助金  
(基盤研究(C)(2)) 研究成果報告書

- 1, 課題番号 10610046
- 2, 研究題目 沖縄染織文化の研究に関するデータベースの構築
- 3, 研究代表者 琉球大学教育学部助教授 片岡 淳
- 4, 研究経費

|        |         |
|--------|---------|
| 平成10年度 | 1,300千円 |
| 平成11年度 | 1,100千円 |
| 平成12年度 | 500千円   |
| 計      | 2,900千円 |

## 研究発表

片岡 淳, 『歴代法案』に於ける染織品の解釈について(一), 琉球大学教育学部紀要, 第53集, 1998年, P165~172

片岡 淳, 沖縄の織物文化, 帝塚山短期大学織物文化研究会会誌「はた」, 第7号, 2000年, P26~31

片岡 淳, 兼城の神女せのきみ服飾遺品の考察, 琉球大学教育学部紀要, 第56集, 2000年, P181~202

片岡 淳, 沖縄の織物の種類について, 沖縄県工芸指導所巡回技術指導テキスト, 2000年, P1~6

片岡 淳, 糸の種類と植物染料の染色技術, 沖縄県工芸指導所巡回技術指導テキスト, 2001年, P1~17

## 研究成果

### 1. はじめに

沖縄県教育委員会が平成5年度から平成8年度までの4カ年間、文化庁国庫補助事業の歴史資料調査(平成7年度からは「史料調査」に変更)に調査嘱託員として参加し、実施した内容は「県内所在染織品調査」にまとめられている。

本研究は、これらの基礎資料のデータベースの構築を計画して、入力作業を行った。台湾国籍の大学院留学生の張秀葱氏にその作業を分担してもらったが、その作業中の討論により、歴代宝案に見られる染織品の解釈についてまとめることができた。

さらに作業をしていくうちに、記述のない資料の再確認を行った際に、筆者が主に担当した繊維の鑑定の基礎的判断基準のない、つまり、非常に主観的な立場での判断をして記録したこと気が付いた。この点の改善のために、久米島自然文化センターの上江洲均館長のご好意により、貴重な資料の脆化した裂を研究室のデジタル顕微鏡で、直接画像処理し、その情報を入力する方向に改善することができた。

また、衣装「大袖衣(うふそでちん、または、うふそでぢん)・胴衣(どうじん)など」の採寸方法として、片方のみの採寸表のため、その衣装の復元をすることができないことがわかった。というのは、沖縄の衣装の仕立ての特徴として、手度法という物差を使わない両手幅「一尋(ひとひろ)」や親指から人指し指までの間の「咫(あた)」という人体尺度を用いて、各人に合った着物丈を見積る古法を、植木ちか子・上運天綾子両氏との再調査をすることによって、裁ち口の糸目を照合することで裁断前の布の状態を確認できた。つまり、琉球の服装は左右同寸法ではない。採寸表および図については、

左右寸法を計らなければならないことが分かった。時間の制約の中での作業のため、資料の再調査をしており、今後も継続して行いたい。378点もの資料は、右肩袖しか計っていないため、公開の段階ではないことがかった。

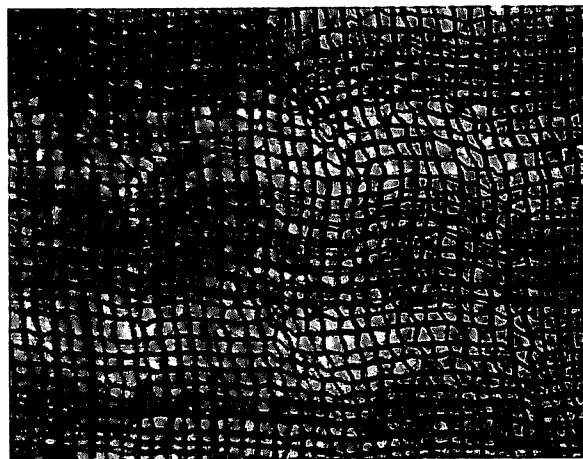
また、ネガ・ポジフィルムを直接画像入力することによって、画像データのカラー調整を容易にすることができた。また、前述の資料は、拡大倍率や色調整などの撮影条件が統一していなかったことのため、データベースとして広く公開するには有効であるが、その正確な情報の提供ができるという点では、現時点において、外部への公開できるものとは限らないことがわかった。

## 2. 沖縄の織物素材

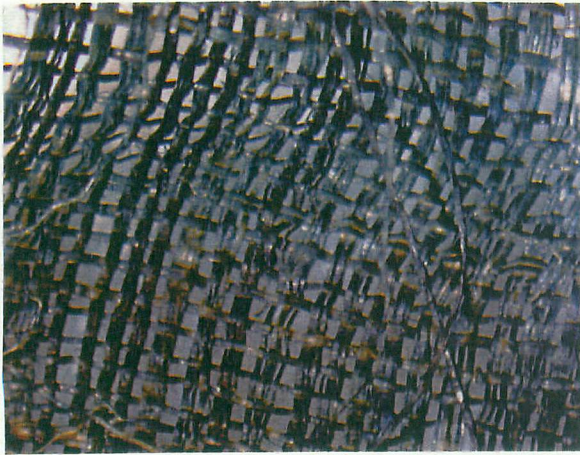
絹・麻類（苧麻・桐板）・芭蕉・木綿など一通り掲載した。これらのこれまでの繊維材質鑑定は、肉眼観察や手触りなどの感覚に頼る域であった。ルーペを使っただけの観察が主であった。この点については、時間と受入先の制限のため、久米島を中心とした資料の収集となった。その理由については、本研究のために購入したデジタル顕微鏡は移動不可能であり、その資料を本大学研究室に寄託して調査してもらえる計画費を計上していないため、また、その所有者の立ち会いが不可能という理由から限られた機関の資料から始めることになった。資料のほとんどは、持ち出し不可能、かつ研究のためには、見学と閲覧許可、そして常に撮影や資料分析の間、立ち会ってもらおうというかなりの制限の中での調査研究状況であることは、改めて申し上げるまでもない。

### 1) 芭蕉

今回の研究調査によって、平織の経糸と緯糸の織密度が現在は、12ヨミ程度であるが、16から18ヨミの密度の芭蕉布が確認できた。また、その糸の作り方の特徴として、細い糸は撚り接ぎをしていると思われていたが、機結びをしている資料が確認された。沖縄本島は機結びで、八重山地方は撚り接ぎと大まかに区別されていたが、王府時代の芭蕉織物は、極細い糸は、機結びをしている。



さらに、この資料は、久米島の芭蕉胴衣であるが、仕立ての布耳を観察すると、緯糸を1本を6段、そして次に2本引き揃えを6段と交互に織っている資料を確認することができ、経糸と緯糸の織密度をさまざまに工夫した織物が織られていたことが分かった。

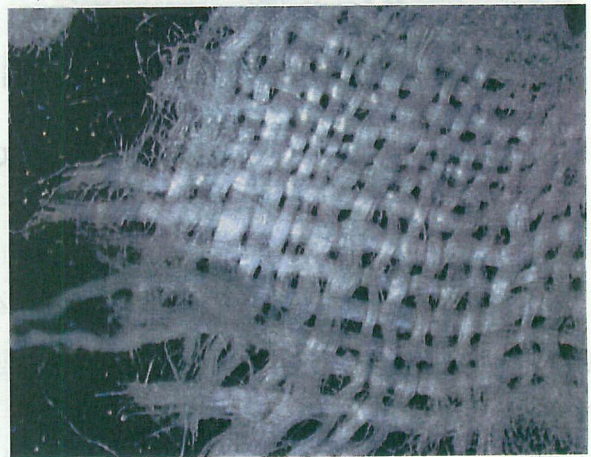


上右の写真は、苧麻繊維の平織布であり、藍色に染まっている。よく見ると、まわりよりも濃い縦線や横線が見受けられる。これは、緋糸ではなく、苧麻の繊維を片撚りつぎすると、その撚り合わさったところだけに、濃く藍色が残っているのである。染めた時には、全体に藍色になっていただろうが、長い年月によって、撚り合わされたところだけが、退色を免れたのである。この点を注意しないと、後染めという判断をしてしまう。

## 2) 苧麻

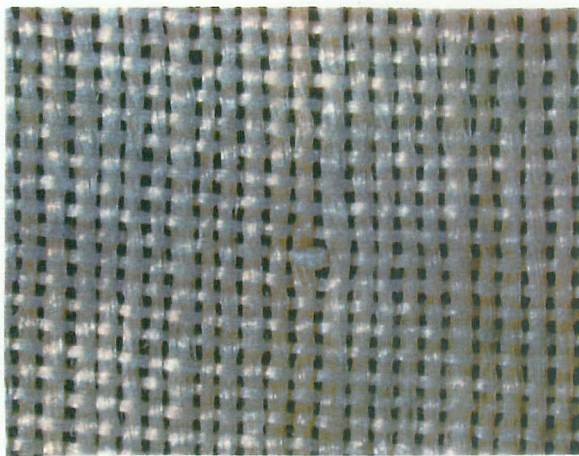


奄美大島宇検村のノ口衣装 水色3本と藍色1本の経緯に緯浮紋織糸が確認できる。さらに緯糸は緋糸を3段織り混ぜている。

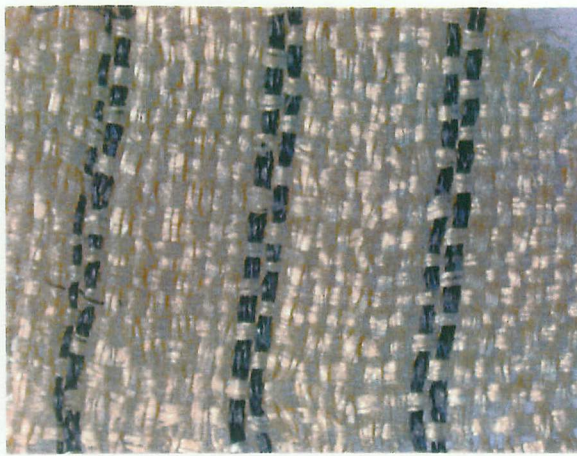


君南風大袖衣の拡大写真 極白く一見して絹繊維のようである。

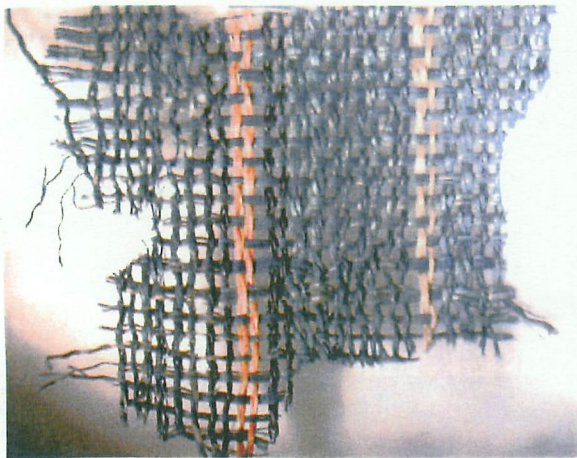
苧麻繊維の織物は、緋織物や藍染めの無地そして男性用の紅型の大袖衣がおもに現在残っている。そのなかで、上記掲載写真左の資料は、首里花織(平織地緯浮紋織)技法で織られ、さらに緯緋をしているたいへん技術の優れた資料がかって、沖縄で作られていたことが言える。今日、苧麻繊維の織物と言えば、すぐに宮古島の宮古上布や石垣島の八重山上布が有名な産地であるが、久米島をはじめ各島に残っており、生産されていた可能性が



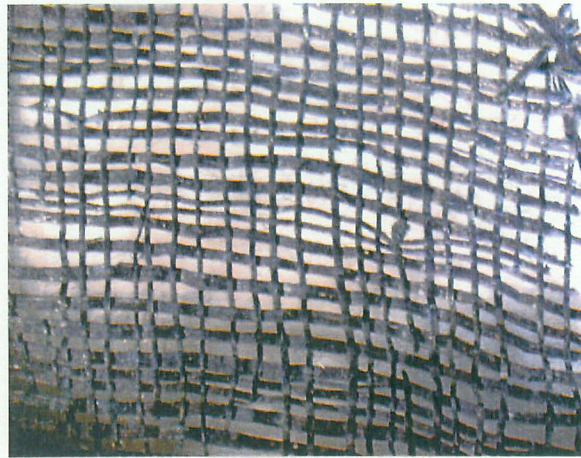
現在2000年製作の喜如嘉の芭蕉布である。機結びによる製糸方法が確認できる。



久米島上江洲家寄託資料 芭蕉平織格子袴 撚り接ぎによる製糸をしている。



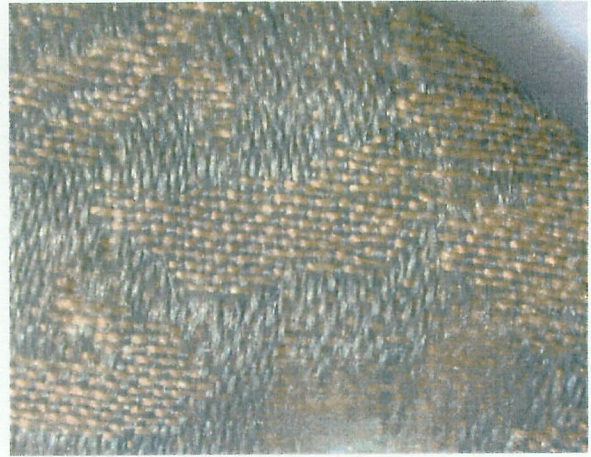
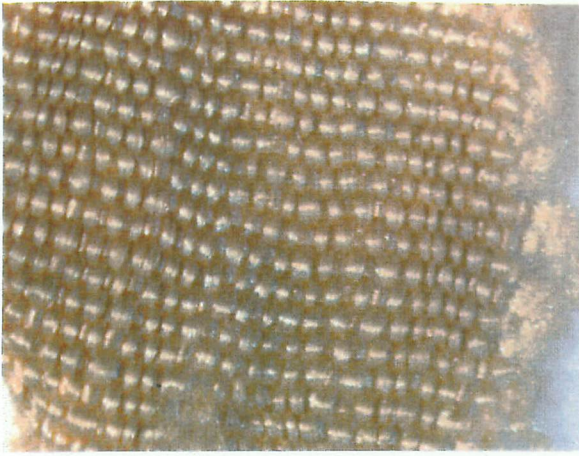
上江洲家寄託の芭蕉経縞大袖衣の拡大写真  
経糸はS撚りで、およそ1ミリに3本の経糸密度である。朱色の芭蕉糸は顔料で着彩している点がこの資料の特徴である。



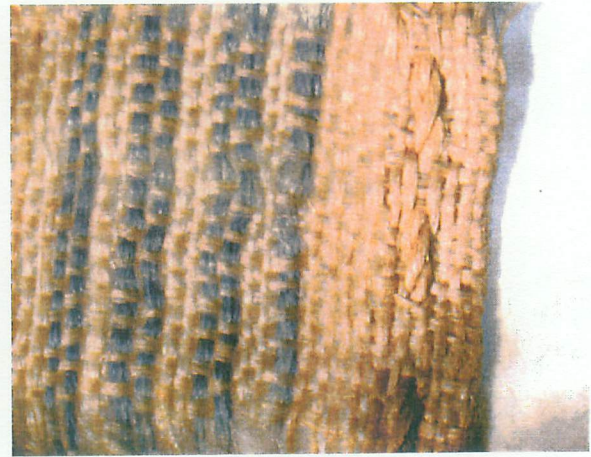
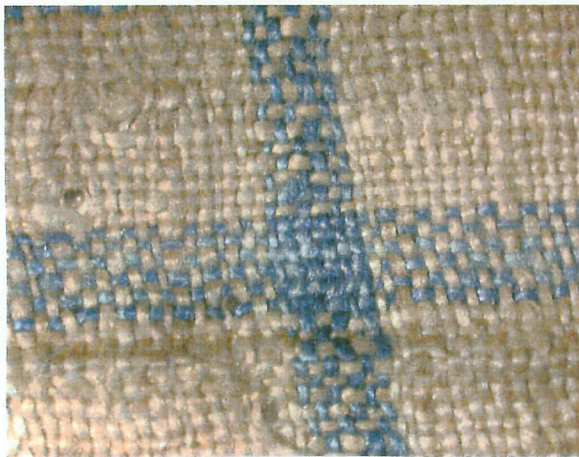
左から8番目、上から10番目のところに機結びした糸が確認できる。

絹芭蕉と呼ばれている資料を今回、改めて観察すると絹と芭蕉の糸で織った織物というものではなく、絹のように細い芭蕉糸で織った織物を指すことがわかった。歴代宝案には、しばしば「細嫩練光土蕉布・細嫩生地土蕉布」として出て来ることは、このようなたいへん細くしなやかな芭蕉布を指したのであろう。また、木綿縞布に朱色（辰砂）の顔料で彩色した衣装のほかにも、芭蕉糸を色着けしたものは、いまのところ、この資料のみであった。黒朝といわれる大袖衣装も今回観察することによって、糸の段階で濃い藍色に染色して、織り上げたことを証明することができた。もちろん、例外的に格子模様で織った布をさらに藍染めした資料も確認することができた。その資料を次にあげる。よく見ると、織り上げた後に、染色すると、緯の織り糸がずれているところは、藍色に染まっていないことが、確認できるであろう。





② 紬



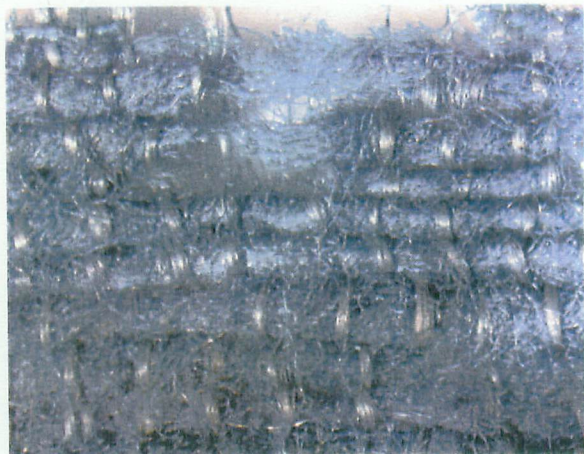
真綿から製糸した紬織物は、一見して木綿のような風合いであるが、ちぢれた細かな繊維の様子ではなく、したがって毛羽立っていない織地合いである。また、極く細い生糸で織った薄い大袖衣は、『混効験集』に見られる「蜻蛉羽衣(あけずばにんす)」といわれる「トンボの羽のような薄い織物」意と解釈されており、このような布を指すのであろうか。

多いにあることがわかった。

### 3) 木綿

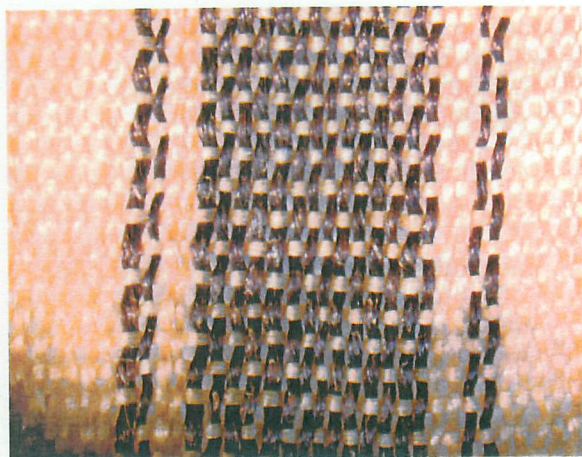
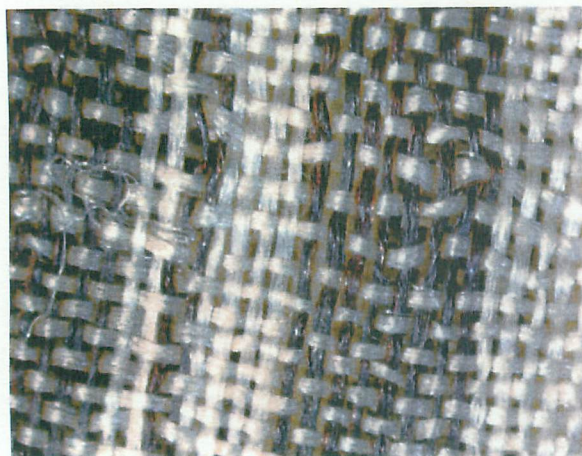


経糸・緯糸ともS撚りの木綿単糸で平織格子に織られている。



経糸は絹の単糸に、緯糸にS撚りの木綿糸を使って織り込んでいる。雲と菊紋様のある大袖衣

### 4) ① 絹

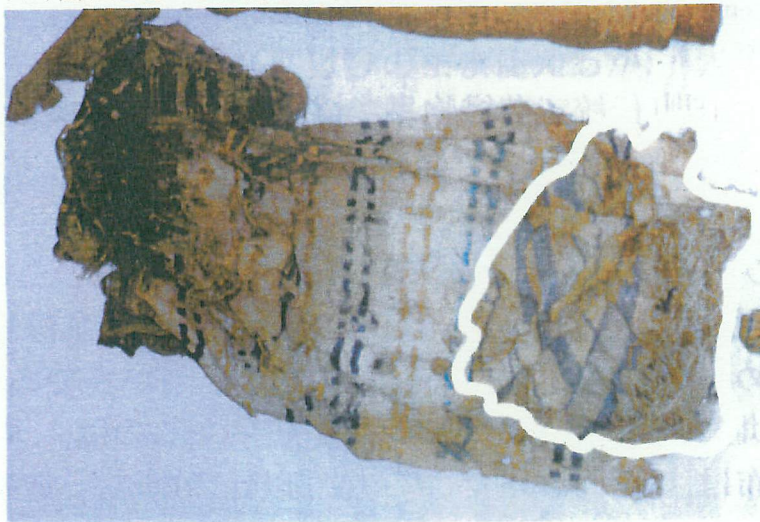


一見すると上記の資料は、ともに芭蕉布に見えるが、左の繊維の一本がたいへん細く、細い生糸が束になって、一目を構成している。右は一本が太く数本の繊維のまとまりになっている。さらに経糸はS撚りがあり、芭蕉糸であることがわかる。どちらも同じような風合いの布であるが、顕微鏡で確認するとそれぞれの繊維の特徴がよくわかる。

(4) 手花織は四種の技法のうち、ただ一つ紋綜統を使用しない技法である。模様を入りたい部分を、手又は竹棒などですくい、模様糸を織り込み、織り終わった模様糸は、裏で裁ち切られる。  
その他には、与那国の「板花織」(シダリ)があげられる。

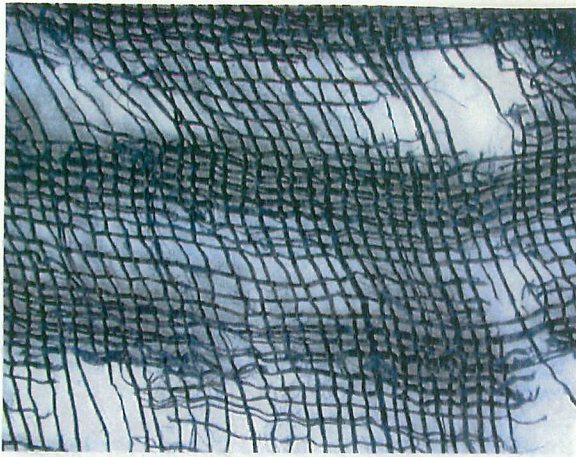
これらの織物産地について、今回の研究調査により、今まで報告されていなかった久米島にも花織資料を見つけることができた。次の写真は久米島自然文化センターの協力のもと、本研究のために初めて特別に撮影と資料調査をさせてもらったものである。この資料は一見すると一枚の布であるが、良く見ると2枚の布であった。向かって左側は織物の布の裏面が出ている。素材は木綿単糸を用い、絹平織地組織に緯浮紋織糸は濃淡の藍染めと現在は茶褐色になった色糸を用いている。もう片方の右の布は藍染めされた経緯糸の格子模様の平織御巾である。どちらもよく観察すると経糸の配列が全く同じであった。このことから、かつては久米島でも花織が織られたことがわかる。いまでは、久米島といえば、紬が有名であるが、芭蕉や苧麻繊維も織物に使われていたことが明らかになった。

所蔵先資料番号 98-105-2 絹地木綿緯浮紋織(花織)御巾  
白く囲ったところは別の手巾であった。



織物の裏 緯紋糸が渡っている。

織物の表面 四つ花紋様



左は芭蕉，右は苧麻である。どちらも極細いが，経糸と緯糸の太さは均一なのに対して，苧麻は，片撚りつぎしたところや経緯糸とも，ともに一定の太さのばらつきがある。



この大きさが，ほぼ原寸の布の大きさである。いかに細かな糸を作り，織っていたかがわかる。このような繊維の種類に関わらず，高い技能を先人たちは，受け継ぎ，だからこそ現在でも，沖縄は，織物技術が優れているのである。

### 3. 花織について

平成12年11月に与那国町伝統工芸織物事業協同組合で「沖縄織物の特徴-沖縄各地の織物の違い-」という題名で発表したテキストをもとに述べる。沖縄の花織の種類や定義について簡単に説明すると，

(1) 首里花織（織り込み花織）というところの両面浮花織のことをさす紋様は，表は緯糸が浮き，裏は経糸が浮き，紋部浮糸以外の糸は地に織り込まれ遊び糸がないため，両面使用できる。本来は緯浮面が表である。

(2) 緯浮花織は，地綜統に加えて，紋綜統を使用するのは，両面浮花織と同様である。織り布は，両面浮花織は，紋部以外の糸は，地糸に織り込まれたのに対し，緯浮花織は，紋部意外の緯糸は裏に長くとび，あそび部分が多いのが特徴である。

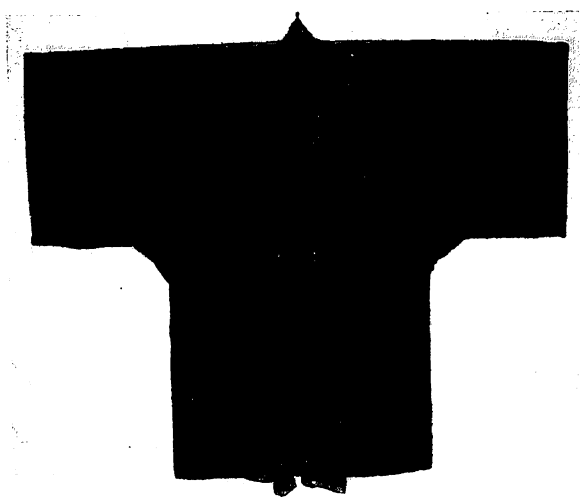
(3) 経浮花織は，地綜統に加えて，紋綜統を使用するのは，両面浮花織と同様である。織り方は，両面浮花織は紋部以外の糸は，地糸に織り込まれたのに対し，経浮花織は，紋部以外の経糸は裏に長くとび，あそび部分が多いのが特徴である。

地もの、そして紅型の両面染めには可能であることがわかった。

琉縫いの着物の材料には、織物や染め物が使われている。無地ものや経縞・緯縞・格子縞などの縞物、緋織物の種類では、経緋・緯緋・経緯緋・経緯多種緋「崩れ格子」(くじりごーし)そして経緋と縞、または緯緋と縞を組み合わせた織物を「綾の中(あやぬな一か一)」といい、緋と格子縞を組み合わせたものに「手嶋(ていじま)」などがある。総緋を「諸取切(むるとちり)」といい、さらに高度な緋織物がある。これらの織物は表も裏も同じ模様をしているので、衿のかぎ断ち方は特に問題なく、布使いができる。

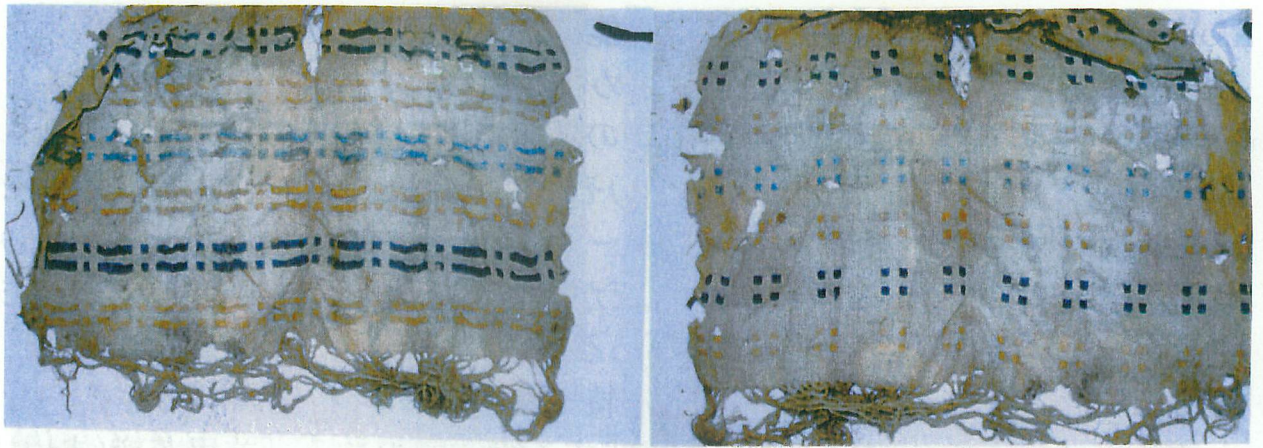
しかし、平織の地組織に地組織を構成する緯浮織のある「首里花織(すいはなうい)」や緋と花織を併用した「花結」、経糸と緯糸を異なる色糸を使って花織をした「こーじゃ(ちらみち)」、平織の地組織に地組織を構成しない緯浮織のある「読谷山花織(ゆんたんざはなうい)」、平織の地組織に平組織を誘導した経糸浮織の「両緋織(ろーとん)」、振り織組織の紹織と花織を併用した「花倉織(はなくらおり)」などは、表と裏の地模様が異なっているので、衿分の1/3丈ほど長い布が必要になる。表裏それぞれ経・緯に浮糸が現れてその地模様に異なった趣になる。

染物の紅型についても、片面染めの紅型は、両面染めの紅型よりも衿分1/3丈ほど長く必要になる。琉球王朝上士婦女子の打ち掛ける装いや、「うしんちー」という琉球独特の着装は、衿の裏側がちらちら見え、また単衣として装うので、両面染めにしている場合が多いと思われる。かぎ衿裁ちをした衿は左右に対象の形が必要である。左右対象の形の衿は、両面違いのない織物や両面染めの紅型はひのまま使えるが、表裏違う場合は、染・織にかかわらず、余分に布が必要になってくる。



久米島仲里村真謝個人所有 神衣装  
「絹緑地卍襷に梅花紋様大袖衣」

ほぼ、身丈の1/2が袖丈であることがわかる。



さらに手巾といわれるものには、手巴美巾(しゅふあみさーじ)という経糸に絹を用い、緯浮糸に色糸で紋様を織り出した資料も今回、公の施設と個人所有者の2点を確認できた。これらの資料は、いわゆる首里・読谷山花織といわれる緯浮紋織物の技法の過渡的な技法を解明するのに、たいへん有意義な情報を提供してくれるであろう。

#### 4. 服飾

大袖衣や胴衣の採寸箇所の未調査による調査カードを、赤い文字色で表わしたところを、今回追加した。このことによって『明治の沖縄』P23には次のような説明がある。

「○尺度を用いず

沖縄人裁縫及び織布の寸を改むる何尺にかゝはらず曲尺鯨尺等一切なし、有るも決して之を用いず其裁縫には長さは左右の指に両端を摘み左右に開きて四尺位即ちといふ短さは手指の骨節を寸以下に代用す一端四十圓餘の禮服を新調するも皆此習慣を用ひて毫も誤謬なしと云ふ」

今回の調査で、大袖衣を中心に、資料を改めて採寸すると、一尋が身丈になり、その1/2が袖丈になる。また、骨節は鈎枉裁ちの寸法になることが、植木ちか子・上運天綾子両氏との協同調査作業のなかで、確信をもつことができた。

染め・織り柄にみる仕立ての工夫について、用布の見積りと裁断をする際に、枉かぎ裁ち方(くんにがた=舟形の形と称した。)という枉布を三つの屏風たたみに折る。この方法では、布の表裏がはっきりしない緋織物や無

## 5. まとめ

久米島というと久米島紬がたいへん有名であるが、本研究により、少なくとも明治時代以前は、織技法としては、花織や紹織があることが、久米島自然文化センターや、島内の個人所有者の資料調査をすることにより明らかになった。

八重山交布・竹富ぐんぼうなどと呼ばれる経糸と緯糸の異なる織物の発生について、小浜島・波照間島をはじめ、聞き取り調査をした結果、手間を必要とし、あるいは、材料の量に因り、経糸を石垣または沖縄本島で仕入れ、緯糸は島内で栽培した芭蕉や苧麻を製糸して、交織の布を織り上げたということがわかった。したがって、全島にそれぞれの植物繊維からの布の生産があったということが裏付けられた。

また、織物素材としては、紬と生糸の製糸名称の定義以外の形状の糸（例えば、玉糸やずりだし糸）が確認できた。このことは、琉球国旧記の越前の人宗味入道が桑の栽培と養蚕を島民に教え、薩摩の人友景が紬を教えたということになっているが、紬の起源について歴史資料の分析からの研究の足掛かりになった。

さらに植物繊維の芭蕉や苧麻が確認できた。これらの糸は現在の喜如嘉の着物を織る密度の平均は、1センチに24本程度の密度（12ヨミ）であるが、32本から36本もの経糸密度（169ヨミから18ヨミ）があった。中には44本というものもあることがわかった。

以上、デジタル顕微鏡の有効が確認できた。

*Dimage Scan Dual II AF.2820U* から、既存の写真・スライド資料を直接画像入力をする事ができた。

*OLINPUS 2.5Megapixel Progressive CCD 3x ZOOM* により、組織がわかる程度の倍率のデータを現場で入力することが可能となった。

琉球服装の研究において、復元可能な調査方法がわかった。また、布の合理的な裁断と縫製をしていることがわかった。

本研究に扱った織物品のうち、織物の拡大写真を通して、繊維の特徴について公表するための基礎的研究資料になった。

幻の布「桐板(とんびゃん)」という繊維の基礎的なデータに成り得る。大城志津子氏の「リュウゼツラン」説、祝嶺恭子氏の「ブランド」説そしてルバス・ミヤヒラ吟子氏の「苧麻」説などがあり、これからもデジタル顕微鏡とカメラを有効に利用して、資料の収集を続けたい。

調査カード 織

調査日: .....

品目: .....

保管者: .....住所: .....

.....電話番号: .....

| 部 位    | 寸法(右) | (左) | 備考 |        |  |
|--------|-------|-----|----|--------|--|
| 袖 幅    |       |     |    | 素材 経   |  |
| 袖 丈    |       |     |    | 緯      |  |
| 袖 口    |       |     |    | 製糸方法 経 |  |
| 袖 付    |       |     |    | 製糸方法 緯 |  |
| ま ち    |       |     |    |        |  |
| 肩 明    |       |     |    | 地色     |  |
| 身丈(着丈) |       |     |    | 紋様     |  |
| 肩 幅    |       |     |    | 織組織    |  |
| 後 幅    |       |     |    | 織密度経/緯 |  |
| 前 幅    |       |     |    | 織布幅    |  |
| 身八つ口   |       |     |    |        |  |
| 衤下がり   |       |     |    |        |  |
| 衤 幅    |       |     |    |        |  |
| だき幅    |       |     |    |        |  |
| あいづま幅  |       |     |    |        |  |
| 衤 幅    |       |     |    |        |  |
| 衤 下    |       |     |    |        |  |
| 衤下付込み  |       |     |    |        |  |
| 総衤丈    |       |     |    |        |  |
| 裾上げ    |       |     |    |        |  |
|        |       |     |    |        |  |

調査者: 片岡 淳 琉球大学教育学部 ☎903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原1番地 ☎098-895-8380



## 染め・織り柄にみる仕立ての工夫

### 「用布の見積りと裁断」

衤かぎ裁ち方（くんにがた=舟形の形と称した。）

積もった衤布を三つの屏風たたみに折る。

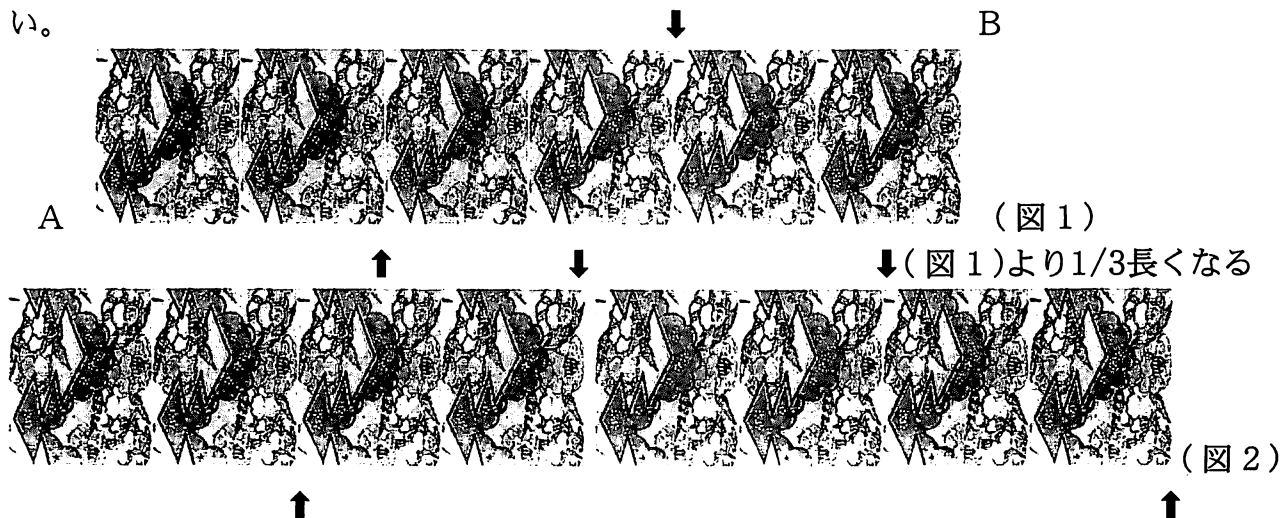
その三つ折り分の布山に一節指分(約2.5cm)の切り込みを互い違いの布側に入れる。そして切り端と他の切り端を斜めに折り曲げて袷を入れる。この方法では、布の表裏がはっきりしない緋織物や無地もののにのみに限ります。(紅型の両面染めには可能)

ここでは、上記の内容についてもう少し詳しく説明をしましょう。

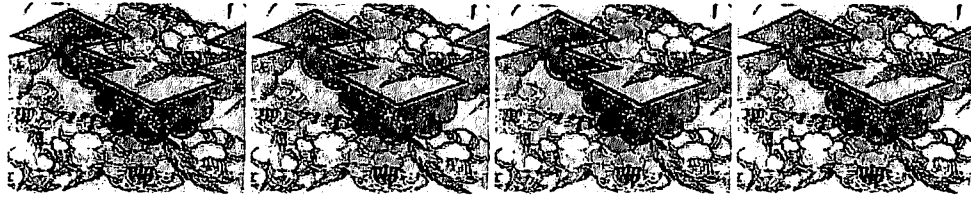
琉縫いの着物の材料には、申し上げるまでもなく、織物や染め物が使われています。無地ものや経縞・緯縞・格子縞などの縞物、緋織物の種類では、経緋・緯緋・経緯緋・経緯多種緋「崩れ格子」(くじりごし)そして経緋と縞、または緯緋と縞を組み合わせた織物を「綾の中(あやぬな一か一)」といい、緋と格子縞を組み合わせたものに「手嶋(ていじま)」などがあります。総緋を「諸取切(むるとっちり)」といい、さらに高度な緋織物があります。これらの織物は表も裏も同じ模様をしているので、衤のかぎ断ち方は特に問題なく、布使いができます。

しかし、平織の地組織に地組織を構成する緯浮織のある「首里花織(すいはなうい)」や緋と花織を併用した「花結」、経糸と緯糸を異なる色糸を使って花織をした「こーじゃ(ちらみち)」、平織の地組織に地組織を構成しない緯浮織のある「読谷山花織(ゆんたんざはなうい)」、平織の地組織に平組織を誘導した経糸浮織の「両緋織(ろーとん)」、振り織組織の細織と花織を併用した「花倉織(はなくらおり)」などは、表と裏の地模様が異なっているので、衤分の1/3丈ほど長い布が必要になります。表裏それぞれ経・緯に浮糸が現れてその地模様に異なった趣になります。

染物の紅型についても、片面染めの紅型は、両面染めの紅型よりも衤分1/3丈ほど長く必要になります。琉球王朝上士婦女子の打ち掛ける装いや、「うしんちー」という琉球独特の着装は、衤の裏側がちらちら見え、また単衣として装うので、両面染めにしている場合が多いと思われます。かぎ衤裁ちをした衤は左右に対象の形が必要だからです。左右対象の形の衤は、両面違いのない織物や両面染めの紅型はひのまま使えますが、表裏違う場合は染・織にかかわらず、余分に布が必要になってきます。次の(図1・2)を御覧ください。

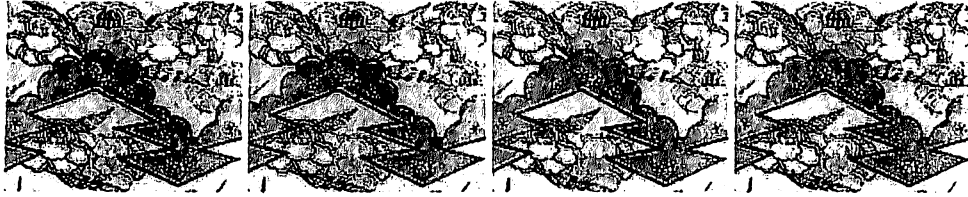
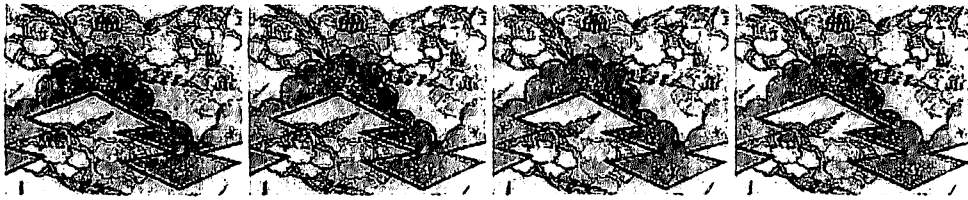


下記の紅型を例に説明すると、松皮菱模様には上下異なる模様になっているため、肩山から対称に型置きをしなければなりません。牡丹模様は上向きと下向きにそれぞれ配置されているので、どちらをつかってもかまいません。また、型紙の使い方で全体の模様印象が異なります。（図 3.4.5）

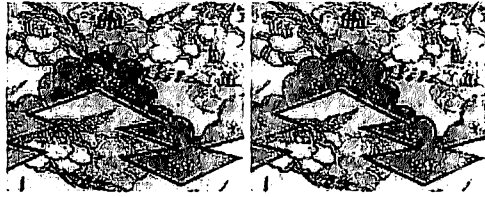


肩山で型紙を180

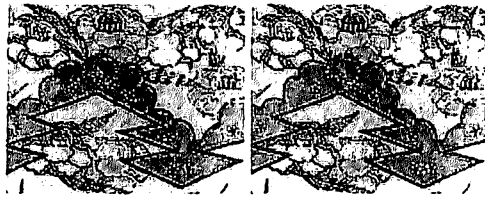
度回転した場合



←袖



←身頃

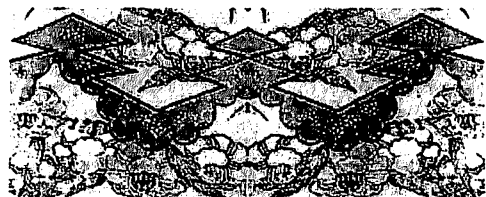
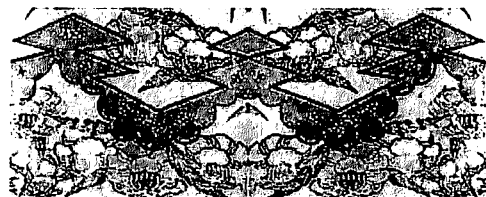


↓背中心



←肩山線→

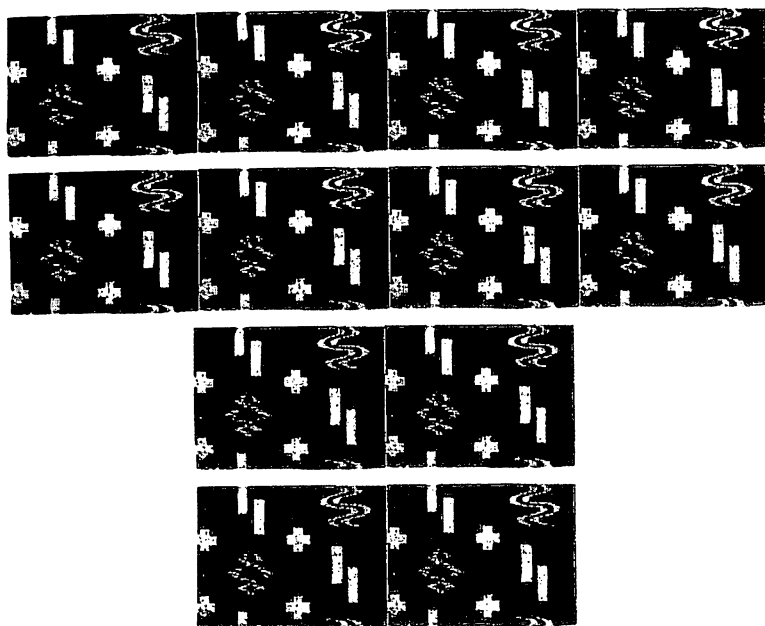
↓背中心



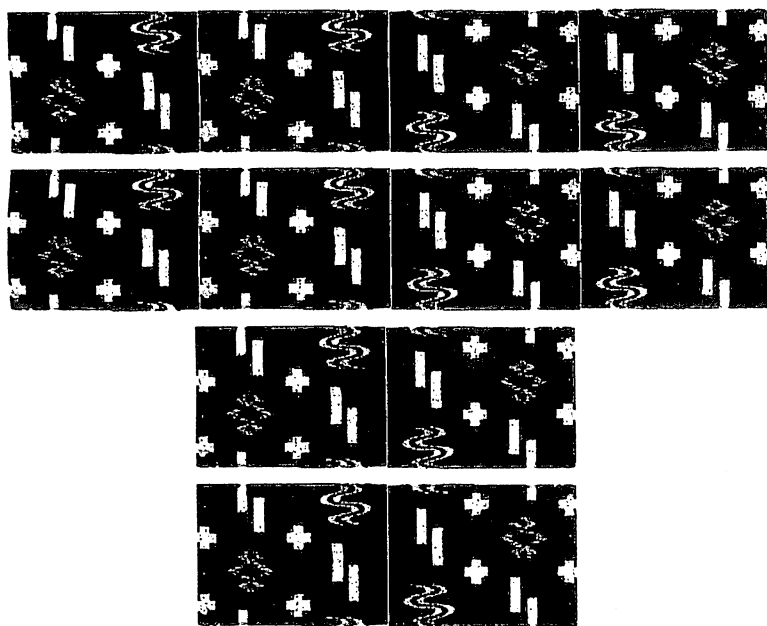
肩山で切り返さない場合（図 4）

型紙を表裏使った場合（図 5）

以上のように型染め用の型紙のデザインは、仕立て上がりを想定して、模様の大きさや割り付けを十分に考慮して作りたいものです。また織物についても同様のことが言えます。(図6.7)



紺模様を上下左右移動した配置 (図6)



背中心に左右対称に配置した場合 (図7)  
(布は左右どちらか裏返す)

このように昔からの柄には、仕立てしたときに美しく映え、しかもよく計算された柄作りが伺えます。